

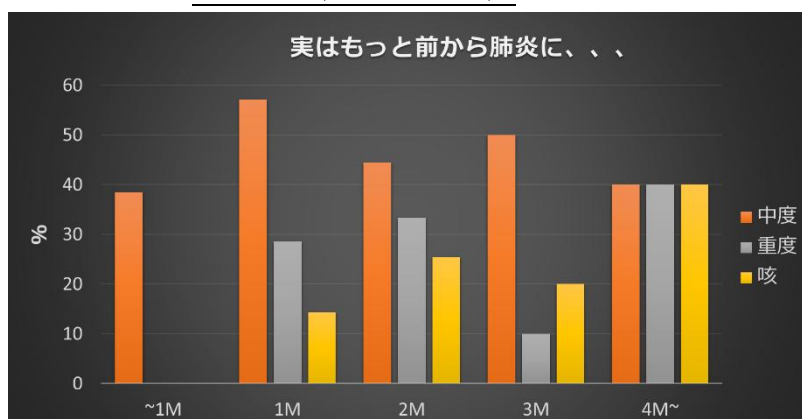
あなたの肺炎はいつから？

「春前になって肺炎かい！」というツッコミもありそうですが、肺炎は寒暖差が大きくなる時期に増える傾向があります。「最近調子よかったのに急に咳が増えた」こんな経験をしたことがある農家さんも多いのではないのでしょうか？特に10~11月、3~5月あたりが要注意です！そんな訳で今回は肺炎（肺エコー）です！

***今回の記事は肺炎の治療に関する内容ですが、決して抗生物質の積極使用を勧めるものではありません。**

肺炎が多い月齢＝肺炎が始まる月齢なのか？

1か月齢以降に肺炎の治療が多い農場で、咳をしている牛の割合と実際の肺炎重症度を肺エコーで診断し比較しました。（肺エコーの説明は省きます。聴診より正確に肺炎を診断できる方法です）農家さんのお話でも、実際に聴診しても **1か月齢（グラフの1M）** から咳が増え、肺の音が粗い牛が増えてきている状況でした。



←比較した結果です（Mは月齢の略です）。咳をしている牛の割合は**重度肺炎割合とはおよそ一致して**いました。しかし！**中程度の肺炎とは一致しませんでした**。さらに**1か月齢以下の牛たちの多くが既に中程度の肺炎になって**いました。つまり、この農場では咳が目立つ前から肺炎になっていたということです。

「咳をする牛＝肺に異常」だが「肺に異常＝咳をする」ではない



今回の農場で肺エコーを撮った150頭ほどの牛の呼吸病スコア（鼻水や咳、体温などから計算される点数）と肺エコーの結果を比較しました。CRS陰性でも6割の牛は肺に異常があり、2割の牛は**重度**でした。最も驚くべきは、**CRS陽性牛の中に軽度や肺炎ではない牛が0**ということです。言い換えますと、呼吸病の**臨床症状を示す牛全てで肺に異常（しかも中度以上）があった**ということになります。これはこの農場だけの話ではなく、肺エコーを使って大規模に肺炎の調査を行った際、**肺に中程度以上の病変が**

あった牛のうち自発的な咳をした牛は40%しかいなかったという報告もあります。（Lowieら2021年JDS）。

つまり、「咳をした時点」で肺に異常がある可能性がかなり高く、**咳を発見→数日経過観察→治療では遅いケースも多い**と思われま

す。まとめになりますが、これから寒暖差が大きく肺炎になる牛が増えるかと思えます。「ゲホッ」という音が子牛たちから聞こえたら「ちょっとした風邪かな？」と様子を見すぎずに**早めの診療・治療**をお勧めします！

特に、離乳後に肺炎による子牛の死亡・廃用がある農場や、調子が悪い搾乳牛を診療したら慢性肺炎だったというケースがある農場では注意が必要です。

***積極的に肺炎コントロールに取り組みたいので、もし肺エコーを使った肺炎コントロールに興味がある方は岩泉までご連絡頂けたらと思います！**